
異世界での日々

異世界に逝きたい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界での日々

【Nコード】

N1134BA

【作者名】

異世界に逝きたい

【あらすじ】

これはただの作者の暇つぶしのファンタジー、読んでくれたら嬉しい。ただそれだけの展開が遅いストーリー

プロローグ？

『お兄ちゃん、僕のこと忘れないでね』

突然妹は変なことをいつてきた。

散らばったトランプを片付けている手が止まる。

『はっ！！、どうした突然？』

『何でもないよ。そうだ、トイレ行ってきてくるよ』

慌てて出て行く妹の後ろ姿が、もう二度と会うことができないとは、この時に気づくはずもなく、しばらく戻ってこない妹を探しにいった。

すると、夕食前の料理をしているお母さんに、

『お母さん、明梨見なかった。』

『明梨って誰のこと？、お人形？私今忙しいからあとでね。』

『何言っているんだよ、明梨だよ、妹だよ、うわあああ』

僕は次の日精神科に連れていかれた。

これが僕の10歳の記憶

プロローグ？ーそして始まり

あれから8年

俺は普通の少年になりました。

普通に寝て起きて、顔洗って、ご飯を一人で食べて、歯磨いて、学校行って勉強して、休み時間には本読んで、昼に一人でパン食べて本読んで、また勉強して、一人で近くの本屋によってから帰って、テレビ見て、風呂はいつて寝るの普通な暮らし。
それが俺のつまらない生き方。

でも今日は違った。

いつもどおり、一人で本屋によってから帰ろうとした時に、黒猫に声をかけられた。

『にゃー、君君その腕時計を見せてほしいのにゃー』

突然のことに思わず鞆を落としてしまう。

気がつけば人の姿がなくなった。今は商店街にいるのにお客も店員一人誰もいない。

『えっ、』

ものすごい速さでBダッシュをして逃げ出した。

つもりだった。さっきから同じところを走っている。

『無駄だにゃ、それより見せてくれるだけでいいんだにゃ。』

無駄に走るのも疲れる。だから見せることにし、腕時計を外し渡す。
猫は立ち上がり受け取った瞬間

『なるほどにゃー』

猫は尻尾を振り振りしながらすぐに腕時計を返してくれた。

『今から君に話したいことがあるんだにゃー 君君異世界興味ないかにゃー』

正直、今の状況にビックリと同時に、妹がいるかもしれない。興味がある。

『あるみたいだにゃー』

『そこに明梨がいるかもしれない。行きたい』

『明梨ね、前に魔力暴発を起こす可能性がある者を何人か送り届けたことがあるから、多分いたと思うにゃ。』

『行く、いくよ、そこに連れてけ。』

『了解にゃ でもその前に話を聞くにゃー、異世界に送ると地球

の関わった記憶と最低限の者が消えるにゃー。君には魔力があるみたいだから、レジストしたみたいなのになゃー。ここまではいいかにゃー？』

『ああ、妹に会いたいから早くしろ』

『そう焦らなくても行かせてあげるにゃー。まずは、今から行く世界は魔法があると同時に魔物とかいるにゃー。君には巨大な魔力がある代わりに放出できないみたいになゃー。だから、今日は偶然見つけたのは奇跡なんだにゃー。それより、送っても魔物にあつてすぐ戦えず死ぬってことないように”記憶の本”の切れ端を与えるんだにゃ。つまり君には、あまり使われないこの”強化魔法の書”のどれかの切れ端をあげるんだにゃー。』

いつの間にか猫の前に無数の本が浮いてありさらに数本の本が消え8冊の本だけが残る。
これが魔法だろう。

『この紙に手を当ててほしいにゃー、いつもなら水晶にも触つてもらうのにゃが、さつき身が壊れてないのが不思議なくらいの魔力を感じられたから割られると経済的に厳しいからやらなにゃー』

猫は自分の毛を一本抜き、それは一瞬のうちに紙になって渡してきた。

言われた通りに触ってみたが変化がない。

『にゃにゃ無属性ですかにゃー。珍しいのにゃー、初めてなのになゃー。ならこの本なのになゃー。これを受け取った瞬間君は後戻りで・・』

やっぱり、浮いていた本が一瞬のうちに消えて一冊の本だけが残る。猫はそれを千切り俺の前に見せてしゃべっている途中に瞬間それを取った。そして紙は光になって俺の体にはいつてくる。

頭が急に痛くなり、俺は気絶した。

『・・・そう、分かったにゃー 一名様ご案内くだにゃー 』

これから俺の新しい人生が始まった。

1日目?—目覚めたら

目を覚ますとそこは知らない木製の部屋の中のベッドに寝ていた。起き上がるうとすると、何かの皮でできたブカブカの服を着ている。誰かが着せてくれたのだろう。

部屋を観察してみると、テーブルに置いてあるコップと花瓶、ロウソクだて以外は木でできている。扉から一番奥の端に今寝ていたベッドがあり、その隣に机と丸椅子があり、机には土を練ってできたシンプルな水の入ったコップと花瓶とロウソクだてがあり、花瓶には見たことがない黄色い花がつんである。あとは、ベッドの足の方に大きさが違う同じ作りのタンスが二つ並んで設置されているだけの必要な物しかなさそうな部屋だ。

そして立ち上がり水を飲んでから部屋から出る。そこには、キッチンで調理をしている女性の服を着た筋肉質な黒人のおっさんがいた。

7

『あら?、もう起きたの?』

変なおっさんが料理をしているのを止め、声をかけてきた。この人は多分命の恩人だろう。

『あつ、はい。え〜と助けていただいてありがとうございます。』

『思ったほど元気そうじゃない。こういうのって2〜3日目覚まさないで聞けど1日で目覚ましちゃうのね。』

『君、私の管理する草原に裸で倒れていたそうなの。その服は私の忘れたい過去のおさがりなのよ？。ちなみに発見者は今はギルドの依頼の途中だったみたいだからすぐにどこか行ったわよ』

・・・どうやら俺は恥ずかしい格好で倒れていたみたいだ。あとその格好で可愛い声は止めてほしい

『すみません。服やベッドを貸していただいて・・・』

『いいのよ？、それにもうその服着れないからあげるわ。それより、あなたのお名前は？』

『・・・・・・・・つ！！』

自分の名前が出てこなかった。覚えているのは、知らない女の子の顔と魔法の使い方だけ、それ以外は思い出せなかった。

『・・・・・・・・そう、なら私の家で一緒にしばらく暮らさない？いい考えだと思わない？』

突然名前も知らない変なおっさんにこんなことを言われた。でも俺は何故か知らない女の子を今すぐに探しにいきたい気分だった。なので、

『すみません、え〜と、「アルシユテラよ、アルさんと呼んで、」アルさん、俺にはそれはできません。今すぐにでも今覚えている女の子を探しにいきたいんです。』

『そう、分かったわ。無理に止めることはできないもの。でも今は体を休めた方が良さそうよ。ここらへんは低級の魔物しかいないけ

ど、魔力もないアナタにもしもがあつたら嫌だから、その子を探しに行くのはもう少し待ってね。今は寝てなさい。』

突然眠くなってきて、体に力が入らなくなってきた。そして俺は倒れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1134ba/>

異世界での日々

2012年1月3日01時59分発行